

創造する文化 京都から世界へ

The Creative Power of Culture : From Kyoto to the World

京都文化カプロジェクト

2016-2020

実施計画

(総論)

平成28年10月

京都文化カプロジェクト実行委員会

目次

京都文化カプロジェクト2016-2020の実施計画策定に向けて	1
1. 京都文化カプロジェクト2016-2020 実施計画の策定	3
2. 事業構成	4
3. 実行委員会事業	5
4. 共催・連携事業	8
5. 認証事業	10
6. 京都文化カプロジェクト実行委員会	11
7. 広報計画～国内外に向けた情報発信	11
8. 財源の確保	11
参考：京都文化カプロジェクト2016-2020基本構想の骨子	12
京都文化カプロジェクト実行委員会 名簿	13

京都文化カプロジェクト2016-2020の実施計画策定に向けて

京都文化カプロジェクト実行委員会 総合監修者 山極 壽一 (京都大学総長)

京都文化カプロジェクトの取組によって様々な新しい「連携」が生まれ、京都の文化が新しい味を出すことができるのではないかと期待しています。

文化は、衣食住という人々の暮らしの中に色濃く表現されているものです。衣食住は、文化だけでなく自然の働きに、強く依存しています。特に京都の文化はそうであり、これからは、生き物と文化、そして、文化と文化の間のつながりを大切に考えていかなければなりません。

その中で、東京がコンテンポラリーなもの、近代的なものに誇りと自信を持っているのなら、京都はそれとは違うものを打ち出していかなければなりません。そのための一つの大きなテーマが「伝統文化」です。京都には千年を超える伝統が今の暮らしに根づいています。

しかし、ただ今のままの伝統文化を見せるのではなく、全く異分野のものと噛み合ったものを見せていくことで「おもしろいこと」ができます。どの伝統文化にも、過去だけではなくて現在があり、さらに現在と未来を同時に提示していくことが重要です。トータルでコーディネートし、複合的な美意識、芸術の総合美が味わえる展開ができればと考えます。

もう一つの大きなテーマが「こころ」です。日本では仏教と神道が習合し、儒教の影響も受けています。西洋の人はそこに不思議な奥行きを感じるそうです。そういったダイバーシティ（多様性）が伝統として生活に根付いている日本人の精神性を世界に伝えていきたいと思います。

そのためには、世界の中の京都の位置を常に念頭に置いておく必要があります。京都の文化の価値は、日本的な視点だけではなく、世界からの視点で眺めなくてははいけません。世界で京都はどう見られているのか、外国人はどういう受け取り方をするのかを意識することで、やるべきことが見えてくることがあります。世界の視線を京都に惹きつけ、京都の文化や思想を世界へ発信する場にしていきたいと思っています。

また、京都市だけでなく、京都府域でも大きなイベントを行い、相互につながりをもたせるべきです。けいはんな学研都市は人文系の歴史文化と最先端の科学技術が融合できる条件が整っています。

10年後100年後にも楽しむことができるレガシー（遺産）が今回のプロジェクトでいくつか残せればいいと思います。長いスパンで京都が世界に対して貢献できるプラットフォームが、ひとつでもふたつでもできるということが大事だと考えます。始めて、育てて、そして続けるということです。

これから「伝統」や「世界」や「未来」を切り口としたテーマのもと、毎年の取組をつなげていくこと、府内各地で繰り広げられる取組をつなげていくこと、歴史文化だけでなく科学技術や伝統産業ともつなげていくことで、思わぬ発見が生まれ、未来へと続いていく。東京2020大会で世界の目が日本に向くときに、京都から「おもしろいこと」をどんどん仕掛けていきましょう。

京都文化カプロジェクトとは

「京都文化カプロジェクト」は、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会等を契機として、日本の文化首都・京都を舞台に行われる文化と芸術の祭典です。

京都では、すでに2014(平成26)年8月、日本を代表する文化的リーダーから「京都文化フェアの呼びかけ」が行われ、それに応えて、同年10月、オール京都で推進委員会が結成されました。推進委員会ワーキング会議での議論のほか、ワークショップで提起されたアイデアや府民市民の皆さまから応募いただいたアイデアを参考に、2016(平成28)年3月「京都文化カプロジェクト2016-2020 基本構想」がまとめられました。

引き続き、同年5月には、事業実施のため実行委員会が設置され、実施計画を検討してきました。

2020(平成32)年に向けて、京都から多彩な文化・芸術を世界に発信するとともに、国内外の人々と交流・協働し、新たな創造の潮流を起こしていきたいと考えています。

オリンピックとはスポーツと文化の祭典

オリンピック憲章では、オリンピズムとはスポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探求するものと規定されています。少なくともオリンピック村の開村から閉村までの期間、文化イベントのプログラムを催すこととされています。ロンドン大会(2012年)の例では、約17万8千件の文化プログラムが実施されました。文化の取組は全国どこにいても、誰もがオリンピック・パラリンピックに参加することを可能にするものです。国では2020年以降を見据え、日本の強みである地域性豊かで多様性に富んだ文化を活かし、成熟社会にふさわしい次世代に誇れるレガシー(※)を創り出す文化プログラムを「ビヨンド ニーゼローゼロbeyond2020プログラム」として認定し、ロゴマークを付与することで、オールジャパンで統一感を持って日本全国の盛り上げを図っていくこととしています。

※ レガシー:東京2020大会をきっかけにした成果を未来につなげること

1. 京都文化カプロジェクト2016-2020 実施計画の策定

オール京都で、2020年東京オリンピック・パラリンピック等を契機に、国内外に京都の魅力を伝え、世界の人々をもてなすとともに、京都の総合的な文化力を示し、世界の人々と協働して新たな創造の潮流が起こせるよう、基本構想を踏まえ、策定する。

また、事業の展開にあたっては、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会や国等との連携協力関係をしっかりと構築していくとともに、文化庁の京都への全面的な移転の進捗状況を踏まえつつ実施する。

(1) 実施計画の基本方針（基本構想を踏まえた実施計画策定の趣旨、考え方）

- ① 京都文化カプロジェクトの中心テーマを具体的な事業にデザインした各年のリーディング事業と、国内外に向けた情報発信など毎年実施する事業を設定する。
- ② 基本構想に掲げられた「世界に開かれた京都」と「未来につなげること」を目指し、世界との連携と未来を切り口とした年次テーマを設定する。
- ③ 東京オリンピック・パラリンピック終了後を見据え、4年間（2016年度～2020年度）の長期的な実施計画を策定するとともに、毎年の実施計画はその都度見直し、より具体化した次年度の事業計画を策定する。

(2) 実施期間

2016年10月開催の、国（文部科学省）主催の東京オリンピック・パラリンピックムーブメントのキックオフ事業「スポーツ・文化・ワールド・フォーラム」（京都と東京で開催）に合わせて、同月からスタートし、東京オリンピック・パラリンピック開催の2020年までとする。

※2020年 東京オリンピック競技大会（7月24日～8月9日）、東京パラリンピック競技大会（8月25日～9月6日）

(3) プロジェクト推進のコンセプトメッセージの設定

2016年から2020年までの4年間を一貫するとともに、プロジェクト推進の拠りどころとなるコンセプトメッセージを設定し、推進の方向性をわかりやすく、府民市民へ、全国民へ、そして世界の人々へと発信する。

創造する文化 京都から世界へ

The Creative Power of Culture: From Kyoto to the World

現在「伝統的」と言われるものの多くが、創生当時「革新的」であったように、今、「はじめる、新しいものをつくる」ことが、100年後、200年後の未来につながっていくことを提示したい。

だれもが不安を抱えている未来に対し、京都の文化力に可能なことは、このプロジェクトを契機に京都の府民市民が明日へと継承していくもの、すなわち未来への遺産を何かひとつでも形にしていこうことである。

2. 事業構成

オール京都の多様性と持続性を活かし、「まちじゅうを舞台」として質の高い取組を多数繰り広げられるよう、裾野の広いテーマで、京都から2020年東京オリンピック・パラリンピック等を祝うシンボリックな事業を展開する。

地方創生の観点からは、京都府内の多様で豊かな文化芸術資源を活用することで、観光振興や関連産業との連携、新産業の創出などの地域活性化をめざす。また、地域の風土や歴史に根差した文化を体験するふるさと学習等を通じた次世代の郷土愛育成なども期待される。

事業は、「実行委員会事業」、「共催・連携事業」に区分し計画する。

また、上記の2事業に加え、これまでから行政・各種団体等が主催実施している文化芸術事業についても、全体で一つの祭典を形成するよう実行委員会が支援協力する。

(1) 実行委員会事業

実行委員会が主導的に企画・推進・資金拠出を行うもの。

基本構想のイベント計画では、プロジェクトの中心となる8つのテーマが例示されている。加えて、イベントアイデア募集や府内各地でのワークショップ等で寄せられた数多くのアイデア等も反映されている。実行委員会事業では、それらを踏まえ、際立ったテーマの探求、レガシーの構築及び東京オリンピック・パラリンピックに直結する祝祭性を重視する。これを、悠久の歴史に育まれてきたヒト・モノ・コトを、一定期間にわたって楽しむことができる「美術・工芸」(アーツ アンド クラフツ)、その場その瞬間で楽しむ「舞台芸術」(パフォーミングアーツ)、そして日常生活の中に息づく「くらしの文化」という3つの分野の視点から実施する。2016年度から2020年度までの4年間イベントを展開するが、2017年度から3箇年は年度ごとに1つの分野に注目し、伝統文化に新たな視点で現代的な解釈を行う試みなど、基軸となるリーディング事業を実施する。

1つの分野に絞ったリーディング事業と合わせて、その他2つの分野のワークショップやイベントなどを順次開催し、幅広く重層的に、様々な規模で事業展開する。特に、継続性を必要とする事業は、2020年までの4年間でゴールを目指す。さらに、2020年には、プロジェクトのピークとなるよう、全分野を融合した総合的な文化芸術の祭典の開催を計画する。また、寛容性、多様性の特徴をもつ日本人の精神性、「こころ」が伝わる、理解できる事業に取り組み、未来への遺産(レガシー)への布石とする。

なお、毎年実施する事業として、国内外に向けた情報発信のためポータルサイトの開設・運用、機関誌の発行及び京都文化カプロジェクトに賛同する企業・団体等の会員を募り、毎年1回、会員相互の連携・協力を確認しあうため、推進フォーラムを開催する。

(2) 共催・連携事業

京都では、すでに行政、経済界、文化芸術団体、大学等が中心となって、京都特有のコンテンツを活用して、多くの事業が実施されている。東京オリンピック・パラリンピック等に向けて、京都で恒例開催されている文化芸術イベントの特別版や周年記念等の事業について、企画・広報などの面で実行委員会が共催・連携事業として支援協力する。

3. 実行委員会事業

各年度のテーマとリーディング事業

2020年まで4年間の事業は、京都に世界中の視線を集めるよう、各事業が連携して継続していくことが必要である。

オリンピック・パラリンピックと同様、文化プログラムも祭典であり、国や東京都や東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会などとの連携はもとより、まずは祝祭感あふれる事業で東京大会の開催を祝い、府民市民が自らの参加を楽しみ、京都と世界の文化的絆を深めたい。そして、温故知新、京都の伝統と現在（いま）の文化の創造性を広く知ってもらうために、世界から全国から集まる人々を、心を込めたおもてなしで迎えたい。そのための格別なアイデアを是非とも実現したい。

1964（昭和39）年の東京大会の時の訪日外国人旅行者数はわずか35万人だった。これに対し、2016年の今年には既に2,000万人を超えようとし、2020年には、政府は4,000万人を超える訪日外国人客数を見込んでいる。訪日外国人の増加に連れて、国内移動も活発化するため、文化芸術を支える多様な主体によって、京都の様々な地域で文化交流が生まれることが期待できる。

新しい芸術の創造は、常に後に続く仕掛けを必要とする。今後を考えていく上で、現代の京都は、若手アーティストの発表の場が少ない。京都は芸術系大学が多いが、卒業後、何人の学生が京都に残るか、それが東京大会以降の京都の文化力の指標ともなる。京都で文化芸術の仕事ができる場を確保することが大事である。是非、次世代を担う学生や若手アーティストに活躍の機会を提供していきたい。

基本構想にうたわれているように、京都を世界に向けて大きく広く開き、日本各地の若者、世界各地の芸術家を呼び込み、彼らが京都が体現している日本の文化芸術と交流することでコラボレーションやコンペティションが生じ、その熱気と興奮の渦が増殖（るつぼ）となり、京都の持つ創造力をより一層高めることになるだろう。

◆ 2016（平成28）年度

テーマ：幕開け！ 京都文化カプロジェクト

10月開催の「スポーツ・文化・ワールド・フォーラム」は、ラグビーワールドカップ2019、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会、関西ワールドマスターズゲームズ2021等に向けて、国（文部科学省）が主催するキックオフ事業であり、その中の文化庁主催の分科会は文化プログラムのキックオフ事業である。

「スポーツ・文化・ワールド・フォーラム」を起点に、学生のまち、京都ならではの大学生による文化発信などをテーマとしたワークショップ等を実施するとともに、京都全体での盛り上がりを促すための推進フォーラムを開催する。

各年度ごとの年次テーマについては、事業計画の具体化と合わせて前年度に確定する。

◆ 2017（平成29）年度

この年は、京都市で「東アジア文化都市2017」や「大政奉還150周年記念プロジェクト」、京都府山城地域で「お茶の京都博」の各イベント（後掲）が開催予定であり、国内外の視線が京都というトポス（場所）に集まる。これらの事業と連携し、2020年に向けた祝祭感にあふれた取組として、パフォーミングアーツに注目したイベントを実施する。

◆ 2018（平成30）年度

この年は、現在まで継承されてきた伝統文化をさらに未来に受け継ぐ年と位置づける。特に、アーツ アンド クラフツに着目した事業をリーディングとして実施する。京都がこれまで継承してきた伝統的な技術等をそのまま展示するだけでなく、現代的な作品を同時に展示するなど、伝統の革新も目指す。

また、この年は、明治維新150年であり、近代日本、文明開化をテーマにした様々なイベントが全国的に開催されるため、近代化遺産などの視点を加える。

◆ 2019 (平成31) 年度

この年は、9月にICOM(国際博物館会議)京都大会2019が開催され、国内外から約3,500人以上の博物館・美術館関係者の参加が見込まれる。これに合わせ、くらしの文化をテーマに、茶会や和食などに関連した事業を実施し、京都から世界に誇る「おもてなしの文化」を発信する。

◆ 2020 (平成32) 年度

東京オリンピック・パラリンピックの本番を迎えるこの年に、3年間繰り広げられたリーディング事業の試みを踏まえて、あらゆる分野を融合した総合的な祭典を開催する。2021年開催の関西ワールドマスターズゲームズへの踏み切り台ともなる。

3つの分野に関する委員意見等

❖ アーツ アンド クラフツ (空間芸術) 美術・工芸

- ▶ どの伝統文化にも、現在があり、単なる過去からの継続ではない。過去と切り離されたコンテンポラリー (現代的) なものはない。歴史の中で培われてきた現代を楽しめる企画にしたい。
- ▶ 例えばクラフト (工芸) の展示会で、器だけが展示されていて、その器の中に料理が盛り付けられていないことがある。最高の工芸作品を目の前に、能などの宴を鑑賞しながら食事を楽しむなど、各分野のイメージをクロスオーバーさせた総合的な芸術を現出させる。
- ▶ 工芸美術の技術を次世代に継承するため、世界中のアーツ&クラフツブランドが京都に集い、町家、寺社等をギャラリースペースに見立て、京都のまちを舞台に世界のクラフツと京都 (日本) の工芸の職人技術を披露する。府民市民はもとより京都を訪れる多くの人々が、京都のまちなかを歩きながら、国、伝統、ブランドの複層的な物語を楽しむ。

❖ パフォーミングアーツ (時間芸術) 舞台芸術

- ▶ 東京都、アーツカウンシル東京と協働で、日本全国での展開を計画されているワークショップ形式で実施される「東京キャラバン」の開催を検討する。キャラバンは、画一的にパッケージされたものではなく、開催地それぞれの「文化との出会い」を魅せるプログラムが特徴であり、全国に先駆けて、京都の文化を生かした、京都でしかできないキャラバンを構成する。
- ▶ 室町時代、北山・東山の「わび・さび」の文化は、宗教、建築、庭園、和服、絵画などの美術・工芸、茶道、華道、香道、和食などの生活文化、能・狂言などの芸能をはじめ、現代の我々の日常生活のあらゆるジャンルに及び、多くの日本文化のルーツとなっている。
歌舞伎発祥の地、人形浄瑠璃発展の地でもある京都の特徴を活かし、古典芸能と現代のコラボレーション (歌舞伎×ボーカロイド等) や、違う分野の古典芸能のコラボレーション (能楽×邦舞×いけばな等) を企画し、世界に発信する。
- ▶ 世界の人々のもう一つの京都 (日本) のイメージは、平安王朝の「みやび」な世界である。
平安時代の宮廷文化、国風文化は、日本文化を象徴するものとして海外の人々の関心も高い。日本人の美意識を途切れることなく今に伝える平安文化は、世界に類を見ないものであり、その代表である『源氏物語』などは、能や歌舞伎にゆかりの演目も多く、現代的、国際的なアレンジのプログラムを実施する。

❖ 暮らしの文化（伝統の現在）

- ▶ 京都のいくつかのエリアで「まちかど茶会」を催し、日本の茶の湯を体験してもらう。同時に茶の湯に限らず、「まちかどいけばな」や、和食や京菓子の「まちかど味見会」などを様々に催し、府民市民も触れることにより、「もてなし」の意識を浸透・共有し、誰もが参画できる持続可能なプログラムとする。
- ▶ 単に個別の作品を展示して鑑賞するのではなく、複合的な要素を交えた生活デザイン、例えば、現代×伝統や食×デザインなどに関心が集まっている。衣食住、お茶会も花会も和服も京都の日常を少し特別に見せ、京都に来てもらえるようなイベントを展開する。
- ▶ 日本の文化を産み出すスピリッツの源である寺院・神社や、その他歴史的建造物や文化的資産を有する各施設の協力を得て、世界各国の現代アートの展覧会や、寺社に伝来する文化を学べる遊び（催し）の体験、非公開文化財の特別公開、皇室ゆかりの施設や文化財の公開などを働きかけ実施する。
- ▶ 未来につながっていくことが一番のキーポイントであり、イベントがなくても自発的に文化にかかわる取組を京都の人たちがやっていこうという気持ちになることこそが、今後につながっていくことである。そのために、多くの地元の方に参加してもらい、地域をまるごと巻き込んでいく。また、プログラム自体に新規性を持たせようとする一過性に終わる場合が多いので、くり返し京都に来てもらえるような大きなビジョンを持ったイベントがよい。人と人をつなぐ流れが重要である。
- ▶ 特徴的な地域の町家の空家などを、人が住んでいた頃の時間と記憶を織り込みながら、空間そのものをアーティストと建築家で協働して作品化し、小さな美術館に変えていく。その場所で、茶会や食事会等を実施することで総合的に見せる。また、複数箇所つくることで回遊するイベントを展開していく。

かつて京都は「日本のハリウッド」と呼ばれ、映画製作・映像文化の中心であり、現在においても映画・映像・アニメ・マンガなどクールジャパンの豊富なコンテンツを有する。こうした京都が得意とする有形無形、新旧の文化資源を上記3つの分野それぞれに取り込み、京都の魅力である観光や伝統産業、食などとも連携して文化と関連産業の振興を図る。

◆ 2016（平成28）～2020（平成32）年度の継続事業

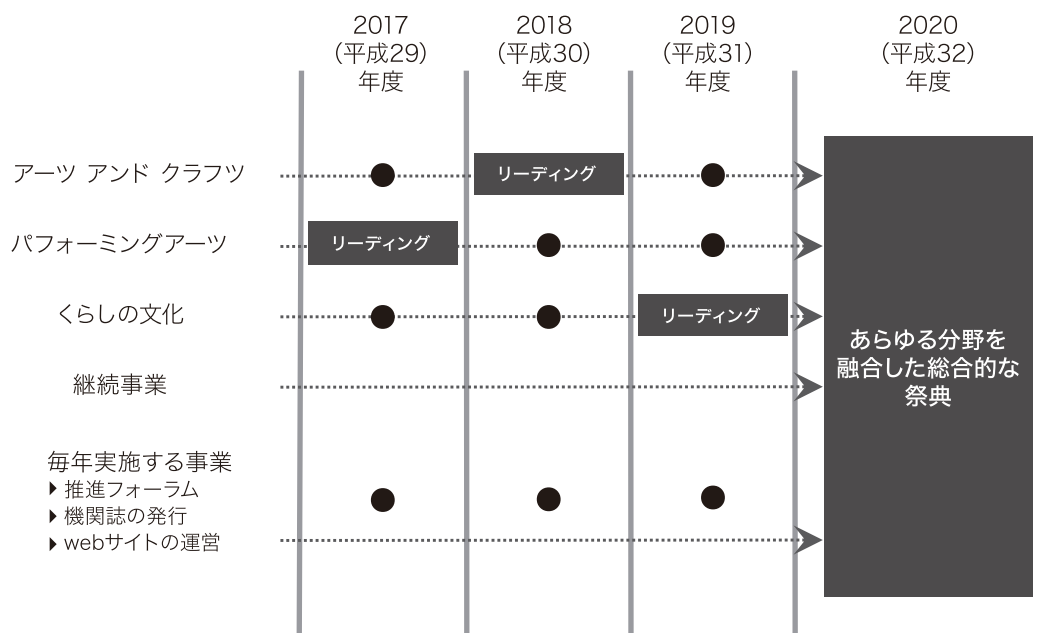
4年間継続的に事業を進め、2020年にその成果を披露するような成長型の事業として、2020年以降にも京都文化カプロジェクトのレガシーとして残る、新しいモノやコトの創作活動などを計画する。

一般には東京が日本のポップカルチャーを体現し、京都は伝統文化を具現するという認識が固定化されている。しかし、京都は長い歴史の中で進取と寛容の精神で他に先駆け、一見すると対極をなす古典芸能からマンガ・アニメ・ゲームまで文化のダイバーシティー（多様性）を創り出してきた地である。これらの多様な文化の中にある「遊び」の要素は、その本質を知ることによって役立つ重要な役割を果たしている。

本来、「遊ぶ」とは、真似をする「真似^{まね}び」、すなわち「学び」であった。真似ることから始まり本質的なものにたどりつくというプロセスが重要である。日常生活の中に遊びがあり、その遊びを真似ることが学びにつながり、それが子どもの成長、すなわち未来につながるという、日本文化の本質を示せるようなプロジェクトを展開する。

京都の企業においては、テクノロジーを伝統産業技術と結びつけ、グローバルに展開してきた。京焼・清水焼からセラミックが、酒造りからバイオテクノロジーが、かるた・百人一首から電子ゲーム・テレビゲームが産み出されてきた。また、スマートフォンも京都企業の電子部品なしに成立しないとまで言われている。そうした先例に学び2020年以降のレガシーを創り出していく。

❖ 実行委員会事業スケジュール



※事業の内容等については、今後検討を進める中で変更することがあります。

4. 共催・連携事業

(1) 2017 (平成29) 年度の主な文化イベント

◆ 東アジア文化都市2017

日中韓文化大臣会合での合意に基づき、日本・中国・韓国の3か国において、文化芸術による発展を目指す都市を選定し、様々な文化芸術イベント等を実施する。東アジア域内の相互理解と連帯感の形成を促進するとともに、東アジアの多様な文化の国際発信力の強化を図ることを目指している。

2017年の開催都市は、京都市、長沙市（中国）、大邱広域市（韓国）に決定しており、京都市では、2016年11月にプレ事業、2017年2月から11月まで開催都市間の交流事業や、京都ならではの文化事業を実施する。さらに、政府主催の「日中韓文化大臣会合」や「東アジア文化都市サミット」も予定されている。

◆ 大政奉還150周年記念プロジェクト

2017年は、二条城で徳川慶喜が朝廷への政権返上を表明した大政奉還から150年を迎える記念の年にあたり、先人の偉業を、近年の研究成果等を踏まえ改めて再評価するとともに、幕末維新をテーマとした文化や観光等の振興に取り組む。また、当時の京都で活躍した先人たちを縁とする自治体と、相互に交流・連携を深める記念事業を実施する。

2016年にプレ事業、2017年は記念シンポジウムをはじめ、サミットや物産展の開催など参画都市との連携事業を実施する。

◆ お茶の京都博

京都府南部12市町村において、お茶にまつわる文化・景観・生活、産業等の保全・継承、発展を通じて宇治茶のブランド価値の向上や「お茶する文化」の再興、地域資源の再認識を推進し、これらの相乗効果を最大化することで、持続可能な地域振興を行う。

2017年度をターゲットイヤーとして、お茶と食を絡めたオープニングダイニングをはじめ、世界茶文化博覧会、献茶会などを開催し、全国に「お茶の京都」をアピールする。

(2) 他団体で想定されている事業の例示

◆ 毎年開催されている事業例

- ①総合フェスティバル系事業 …… 京都学生祭典、KYOTO CMEX (KYOTO Cross Media Experience)、京都府高等学校総合文化祭、京都文化祭典
- ②パフォーミングアーツ系事業 …… KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭、Kyoto演劇フェスティバル、京都岡崎レッドカーペット
- ③アーツ&クラフツ系事業 …… 木津川アート(木津川市)、京展、京都アートフリーマーケット、KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭、京都現代写真作家展、京都とっておきの芸術祭、京都府新鋭選抜展、京都野外彫刻展、伝統産業の日、ニューイ・ブランシュ KYOTO、府庁界限まちかどミュージアム
- ④音楽系事業 …… 赤れんが Summer Jazz+ (舞鶴市)、ALTI芸術劇場、京都音楽博覧会、京都・国際音楽学生フェスティバル、京都大作戦(宇治市)、京都の秋音楽祭、はだしのコンサート(京丹後市)、ミュージアムコンサート、Live! Do You KYOTO?
- ⑤伝統文化系事業 …… 華道京展、上方落語勉強会、狂言五笑会、京都新世代いけばな展、京都新能、京都をつなぐ無形文化遺産、五感で感じる和の文化事業、古典の日推進事業、市民狂言会、市民大茶会、市民寄席、全国高校生伝統文化フェスティバル
- ⑥映画・映像・アニメ等コンテンツ系事業 …… アニメ祭GO-TAN(宮津市等)、岡崎ときあかり、京都太秦シネマフェスティバル、京都国際インディーズ映画祭、京都国際映画祭、京都国際学生映画祭、京都国際子ども映画祭、京都国際マンガ・アニメフェア(京まふ)、京都ヒストリカ国際映画祭、京都フィルムメーカーズラボ、京まちなか映画祭
- ⑦次世代教育事業 …… 学校教育をはじめあらゆる機会を通じた伝統的な文化芸術に触れる取組、京都・和の文化体験の日、高校生「京の文化力」推進事業、高校生伝統文化事業、こころを育む古典の日推進事業、歴史都市京都から学ぶ ジュニア京都検定、食の味らい故郷づくり事業、夏休み・冬休み芸術体験教室、文化を未来に伝える次世代育み事業、ぶんぱく子ども教室、ようこそアーティスト 文化芸術とくべつ事業

◆ 他団体で想定される事業例（毎年開催されるものを除く）

- デジタルアーカイブの取組について議論するアーカイブサミットの開催
- 明治維新150年を記念した展覧会
- 国公立4館（ミュージアムフォー）が連携した京の至宝の公開
- 博物館・美術館、寺社、庭園、工房、旧家などの所蔵品公開
- 寺院・神社等の境内で伝統的な行催事の復興などによる新たな集い
- まちじゅうでお茶、和食、京菓子、いけばななどを楽しむイベント
- 先端産業、障害者の芸術、京都の北から南まで多様な主体による事業

◆ 他団体が実施する文化・学術関係の表彰事例

京都市文化芸術顕彰制度、京都賞、京都創造者大賞、京都府文化賞、文学賞（親鸞賞・蓮如賞）、みんなで選ぶ京都本大賞、紫式部文学賞（宇治市）

5. 認証事業

(1) 事業の認証

進取の気性に富む府民市民の間では、これまで様々な切り口で多彩な事業が実施されているが、期間中に京都で催される多種多様な文化芸術イベントを認証する。加えて、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の「東京2020参画プログラム」や内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会推進本部事務局の「beyond2020プログラム」として認証手続きを支援する。

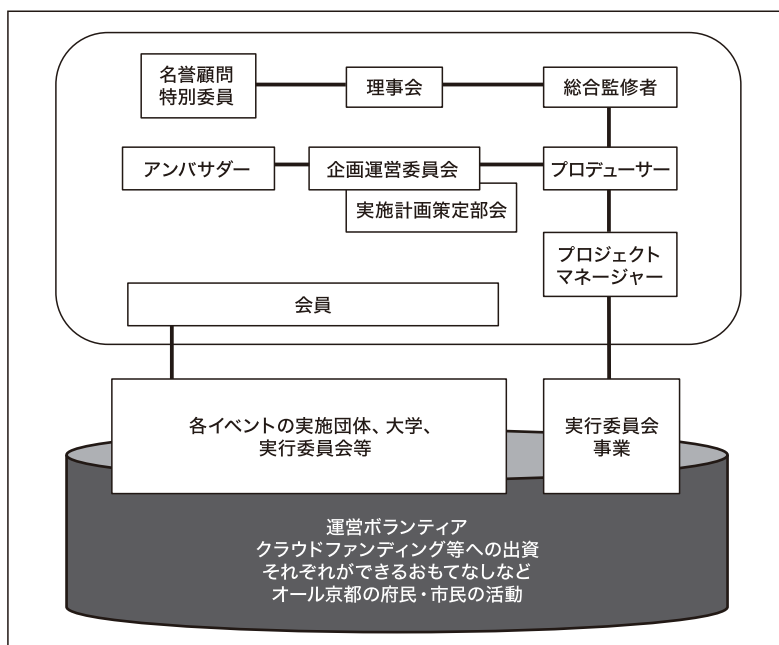
認証された事業は、実行委員会ホームページを活用し、国内外へ発信するなど主に広報面で支援する。

(2) 統一的なシンボルマーク・ロゴマーク等の設定

多様な実施主体による多彩なイベントが、一つの旗印の下に大きな祭典を形成して見えるよう、統一的なシンボルマーク・ロゴマーク等の設定が必要であるが、国（内閣官房）や同組織委員会等が設定するロゴマークとの連動を図る。

6. 京都文化カプロジェクト実行委員会

(1) 体制イメージ図 (基本構想より)



実行委員会の事務局は、京都府、京都市、京都商工会議所の三者共同で設置運営するものとする。

※2017年度京都に設置される文化庁「地域文化創生本部（仮称）」との連携も視野に入れる。

(2) 会員制度について

京都府内の北部地域から南部地域まで、また京都府内外を問わず、広くその趣旨に賛同する団体・企業等からなる会員を募り、参画できる仕組みを策定する。

7. 広報計画～国内外に向けた情報発信

日本はもとより世界の人々が、東京オリンピック・パラリンピックを契機に、4年間を通して、スポーツだけでなく「もう一つの感動」を味わうために京都へ行こうと思ってもらえるよう、積極的な広報を行う。

広報にあたっては、各種マスメディアを通じた情報発信や機関誌の発行、首都圏・海外向けPRキャンペーンのほか、最新の情報をスマートフォン対応の公式ホームページに掲載するとともに、イベントの動画配信やSNSの活用、自動翻訳（英語、中国語、韓国語）による多言語化などにより、国内外に向けた情報発信を実施する。

また、様々な参画主体が、認証を受けたイベントを実行委員会等のホームページを使って自ら情報発信できるようなシステムを構築し、情報発信を支援する。

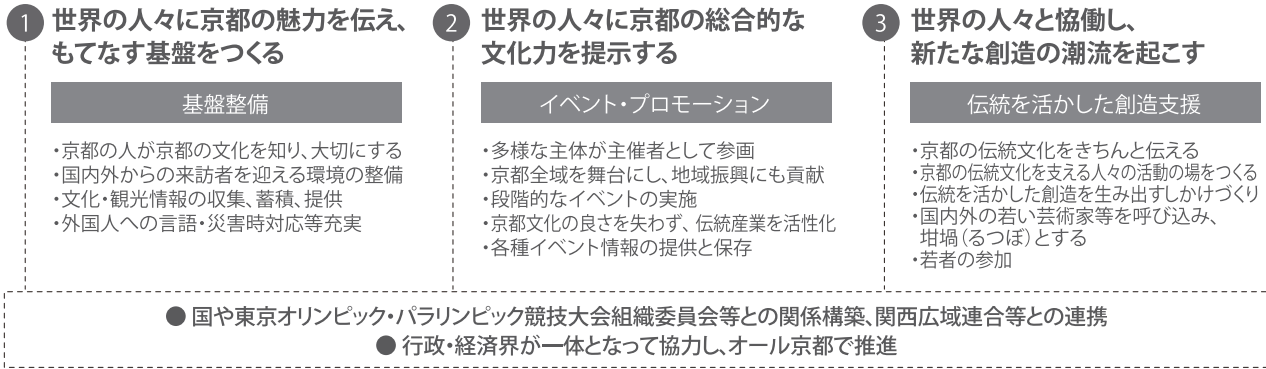
8. 財源の確保

事業を繰り広げるには、財源の確保がもっとも重要である。公的な財源とともに、京都府内の企業・団体、個人等だけでなく、首都圏や海外の企業・団体、個人など、誰でも応援・参画できる仕組みづくり、なおかつ、寄附やクラウドファンディングなどの資金提供に合わせて、物品支援や広報支援なども受けられるよう働きかけ、府民市民、国内外の様々な人々の参加を促し、機運醸成を図っていく。

参考：京都文化カプロジェクト2016-2020基本構想の骨子

(平成28年3月：「京都文化フェア呼びかけ」に基づく推進委員会)

3つの目標と推進方針



文化イベントの事業構想

基本事項	期 間	2016年－2020年 キックオフ事業は、2020年東京オリンピック・パラリンピックのムーブメントを国際的に高めるために京都と東京で開催される2016年10月の「スポーツ・文化・ワールド・フォーラム」
	会 場	京都府全域
	事業主体	行政、経済団体、文化芸術団体・文化施設、観光関連団体、大学、住民団体 等
事業内容	インフラ整備	① 京都の文化財の保全 ② 京都全体の観光地域の整備 ③ 情報システムの整備 ④ 国立京都伝統芸能文化センター(仮称)、国立デザイン工芸美術館等の誘致
	イベント計画	京都の特徴や蓄積を活かし、多彩な参画を呼び込み「まちじゅうを舞台」へ導くシンボリックかつ関連事業などの裾野の広いテーマ
中心となるテーマの例示	1 伝統文化×現代芸術 京からオリンピックを祝う事業	<ul style="list-style-type: none"> ・オリンピックの開催を喜ぶ気持ちを表すため、世界から京都を訪れる人々と府民・市民が京都文化を楽しむ「宴」を開催 ・アート展示、音楽、いけばな、能・狂言、舞踊、インスタレーションなどのコラボレーションや、文化施設の回遊など京都らしい催し
	2 京のまちじゅう博覧会	<ul style="list-style-type: none"> ・国公立4館が連携した京の至宝の一斉公開や、博物館・美術館、寺院・神社、庭園、伝統産業の工房や老舗店・旧家等の所蔵品公開
	3 京のまちじゅう舞台	<ul style="list-style-type: none"> ・楽劇、演劇、舞踊、伝統芸能などの舞台芸術や、誰もが参加できる「踊りまくり」イベント
	4 寺院・神社等で文化発信拠点事業	<ul style="list-style-type: none"> ・寺院・神社等の境内で、伝統的な行催事の復興などによる新たな集いの発信
	5 京のもてなし茶の湯・いけばな・和食 等	<ul style="list-style-type: none"> ・まちじゅうでのお茶のおもてなしや、京料理をはじめとする和食や京菓子、いけばなも多くのの人々に楽しんでもらう
	6 日本の文化・学術などに関するシンポジウム 等	<ul style="list-style-type: none"> ・明治維新150年、京都学、源氏物語などをはじめ日本のアカデミックな魅力を京都から伝える学術系イベント
	7 多様な実施主体が京都の文化の底力をみせる事業	<ul style="list-style-type: none"> ・先端産業、障害者の芸術、京都の北から南まで豊かな自然や永い歴史に培われた海・森・お茶の京都、日本遺産 等
	8 未来に広がる新京都文化	<ul style="list-style-type: none"> ・未来につながる府民・市民から全く新しい提案の出現を期待

行政が中心となって整備
オール京都で要望等活動

◆ 名誉顧問

氏名	団体名・役職等
梅原 猛	哲学者
坂田 藤十郎	歌舞伎俳優
千 玄室	茶道裏千家前家元／ユネスコ親善大使／ (公財) 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会顧問
山中 伸弥	京都大学iPS細胞研究所所長・教授
冷泉 貴実子	(公財) 冷泉家時雨亭文庫常務理事

◆ 理事

◎共同代表理事 ※総合監修者

氏名	団体名・役職等
顧問	長尾 真 京都府公立大学法人理事長／ (公財) 京都市音楽芸術文化振興財団理事長／元京都大学総長
理事	青柳 正規 前文化庁長官
	荒巻 禎一 (公財) 京都文化財団理事長
	有馬 頼底 京都仏教会理事長
	池坊 専好 華道家元池坊次期家元
	井上 八千代 京舞井上流五世家元
	門川 大作 ◎ 京都市長
	近藤 誠一 (公財) 京都市芸術文化協会理事長
	佐々木 丞平 京都国立博物館長／独立行政法人国立文化財機構理事長
	佐々木 雅幸 文化庁文化芸術創造都市振興室長
	千 宗室 茶道裏千家家元
	立石 義雄 ◎ 京都商工会議所会頭／京都府商工会議所連合会会長
	田中 恆清 京都府神社庁長
	村田 純一 (公財) 京都文化交流コンベンションビューロー理事長
	山極 壽一 ※ 京都大学総長
山田 啓二 ◎ 京都府知事	

◆ 特別委員

氏名	団体名・役職等
在田 正秀	京都市教育長
太田 達	(公財) 有斐斎弘道館代表理事
沖田 康彦	京都府商工会連合会会長
小田垣 勉	京都府教育委員会教育長
柏原 康夫	(公社) 京都府観光連盟会長 / (公社) 京都市観光協会会長
金田 章裕	京都府立総合資料館長 / 元人間文化研究機構長
後藤 和子	摂南大学経済学部教授
佐々木 稔納	京都府市長会会長
佐藤 卓己	京都大学大学院教育学研究科教授
潮江 宏三	京都市美術館長
汐見 明男	京都府町村会長
白石 方一	京都新聞ホールディングス社長
杉本 節子	(公財) 奈良屋記念杉本家保存会常務理事兼事務局長、料理研究家
高橋 信也	森ビル株式会社顧問
建畠 哲	京都芸術センター館長、多摩美術大学学長
寺井 友秀	NHK京都放送局長
松浦 晃一郎	明日の京都文化遺産プラットフォーム会長
美濃 導彦	京都大学学術情報メディアセンター教授
村井 康彦	国際日本文化研究センター名誉教授
門内 輝行	大阪芸術大学芸術学部建築学科教授、京都大学名誉教授
柳原 正樹	京都国立近代美術館長
吉澤 健吉	京都産業大学文化学部教授
吉田 美喜夫	(公財) 大学コンソーシアム京都理事長
鷲田 清一	京都市立芸術大学学長・元大阪大学総長
渡邊 隆夫	京都伝統工芸産地協会会長

◆ 監事

氏名	団体名・役職等
中西 文章	京都府副会計管理者
中野 雄介	中野公認会計士事務所所長 / 公認会計士
吉田 良比呂	京都市文化市民局共同参画社会推進部長

◆ 企画運営委員

○主幹委員

氏名	団体名・役職等
桂 良彦	(公財) 大学コンソーシアム京都専務理事
門 道夫	(公社) 京都府観光連盟専務理事
川勝 正樹	京都府町村会事務局長
窪田 裕幸 ○	京都商工会議所産業振興部長
神山 俊昭	(公財) 京都文化財団常務理事
谷口 義隆	京都府市長会事務局長
長谷川 淳一	(公社) 京都市観光協会専務理事
平竹 耕三 ○	京都市文化芸術政策監
藤井 宏一郎	(公財) 京都市音楽芸術文化振興財団専務理事
松村 憲次	京都府商工会連合会専務理事
森下 徹 ○	京都府文化スポーツ部部長
山内 秀顕	(公財) 京都文化交流コンベンションビューロー専務理事
吉田 真稚恵	(公財) 京都市芸術文化協会専務理事

◆ 実施計画策定部会

氏名	団体名・役職等
大西 清右衛門	千家十職釜師、大西清右衛門美術館館長
栗山 圭子	京都新聞社編集局文化部編集委員
佐藤 卓己	京都大学大学院教育学研究科教授
鈴鹿 可奈子	株式会社聖護院八ッ橋総本店専務取締役
高橋 信也	森ビル株式会社顧問
高橋 拓児	株式会社木乃婦代表取締役
長澤 香静	京都仏教会事務局長
中嶋 茂博	京都府神社庁参事
細井 浩一	立命館大学映像学部教授
森西 真弓	大阪樟蔭女子大学学芸学部国文学科教授
森山 直人	京都造形芸術大学舞台芸術学科教授、京都国際舞台芸術祭実行委員会委員長
保科 秀行	京都府文化スポーツ部理事
北村 信幸	京都市文化市民局文化事業担当局長
河村 房江	京都商工会議所産業振興部ブランド推進担当課長

[お問合せ先]

京都文化カプロジェクト実行委員会事務局

京都府文化スポーツ部文化交流事業課

電話 075-414-4279

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課

電話 075-366-0033

京都商工会議所産業振興部

電話 075-212-6450
